【巻頭特集対談】奈良教育大学　大学オリジナル化へ

学長対談

学生の企画力・実践力・組織力と社会性の向上に期待

教育実習関係支援や、就職支援、図書の充実、課外教育活動関係支援に、奈良教育大学後援会会費が活用されている。学生の様々な活動を支援する重要な組織である後援会の会長にお越しいただき、学長とお話いただきました。

花岡　昭憲
奈良教育大学後援会　会長

柳澤　保徳
奈良教育大学　学長

教育者の立場として

学長　いつも大学へのご理解をいただきましてありがとうございます。後援会からの助成費で、学生の数々の活動が有意義に行われています。ところで花岡さんご自身も、高校の先生をされているとうかがいました。教育者のお立場から見て、奈良教育大学はどのような印象ですか。

花岡　教員養成系の大学としては伝統があるところであり、やはり地元の大学で、地域密着型の人材養成ができるところだと思っていますので、卒業して教師になられる方たちに期待しています。それに今この学校に通わせていただいています息子は、附属の幼稚園・小学校・中学校にも通わせていただいていましたので、愛着といいますか、親近感がありますね。

学長　そうでしたか、ずいぶん以前からのお付き合いになるのですね。それではこの大学のこともよくご存知ですね。

花岡　おかげさまで後援会会長というお役目をいただいておりますので、他の保護者のみなさんよりは、大学にうかがう機会が多くありますね。

特色ある大学教育

学長　昨年の秋ですが、本学が文部科学省による『特色ある大学教育支援プログラム』に採択されました。これは、優れた教育を実践している全国の大学・短大が選ばれるものなのですが、六百六十四校から本大学を含め八十校が選ばれたのです。

花岡　本当にすばらしいことです。どのような内容のものだったのですか。

学長　教育課程の工夫改善に関するテーマで、『現代的課題に対応する導入教育科目群の展開』という取り組みで応募しました。しかしこの採択によってこれからが安泰だということではないのです。この教育評価に対する信頼性をより一層高めていかなければなりません。社会的にも学生の学力の低下や、学習意欲の低下への対応が問い正されていますが、教育養成系大学として教養教育の充実を図り、特色ある取り組みを今後も続けて実践、発揮していかなければならないという大きな使命感もあります。奈良教育大学の教員養成はほかとは違うというところをこれからは示していかなければいけないと思っています。

花岡　これからは大学のあり方と共に、大学のオリジナル化などが問われる時代なのですね。国立大学法人にともない出された奈良教育大学の『中期目標・中期計画』で、学生への支援に関する目標の中に『学生による企画やプロジェクトの計画並びに実施を通じ、企画力・実践力・組織力の育成と社会性の向上を図る』とありましたが、これらの目標はこれからの学生にとって、とても重要なテーマになるものだと感じました。

大学側のサポートも重要に

学長　大学側としましては、その支援体制として、自分の関心のある分野に体験的に入っていく仕組みをサポートするなどのシステムも考えていかなければならないでしょう。そのためには夢を語る、夢にむかって進む、学生の企画力が必要になってくるのです。例えばそれ以外にも、学校支援としてボランティアで、いろんな学校に学生が出かけていくような仕組みも作っていきたいと考えています。実はこのような学校支援は昨年度から試行的に行っていまして、将来教員になろうとする学生が、附属学校以外に出かけていくのですが、実践でいろいろと学ぶことがあるようです。教育実習ではありませんが、大学では学ぶことのできない経験をして、よいものを吸収してきているようです。

花岡　人材養成を通じて地域に貢献していくこともこれからは必要だと思いますので、とてもよい試みだと思います。

学長　国立大学法人化は大学教育改革の一環だと考えています。大学での教育という仕事と同じ意味で、学生の支援というものも、本来の仕事になってきます。また学生のみなさんにとってもいろんな変化が出てくるでしょう。本学学生課は三年前から『学生サービス課』という名称に変わっており、意識

自立の精神を持つことが重要

的にサービスの強化を行っています。就職支援など学生のみなさんが教員採用試験に向けて、意欲をたかめていけるようなサポートも今まで以上にしていかないといけないと思っています。

花岡　そのサービスが学生にどのように反映されるかというのは、我々も気になるところです。しかしサービスが高すぎて、過保護になりがちにならないようにしなければいけないですね、大学が高等学校化になってしまう可能性もありますから。そのあたりで大学側も、学生も、お互いの意識をしっかりともっていかなければいけないと思います。学生自身が、自立の精神をもつことが重要になってくるのではないでしょうか。

学長　本当にそのとおりです。支援が自立を弱めてはいけない、自立をのばす支援でないといけないということですね。大学側の教育の目的意識がはっきりしていますので、あとは学生のみなさんの実行力に期待します。

目的意識がある限りゆるぐことなく

花岡　私たちの学生のころに比べて、奈良教育大学生のイメージは、とてもおとなしい感じがします。今の学生という立場のみなさんは全国的にもとても無気力だともいわれていますが、いかがでしょうか。

学長　教育養成系の小規模大学ですから、どうしてもおとなしいイメージで感じられるかもしれません。奈良教育大学の学生のみなさんは教員になろうという目的意識がしっかりしていますので、ゆるぐことなく日々がんばっていると思います。

花岡　そうですね。私の職場でもこちらの卒業生がいますが、教師として完成されたレベルで実践の場に入ってこられていますので、社会的にも奈良教育大学のレベルの高さは認識されていると思います。しかし国立大学法人化にともなって、もっと高いレベルの教師が求められることになるでしょう。今まで気がつかなかった分野にも目をつけていかないといけないと思いますよ。

PROFILE

花岡 昭憲　*Akinori Hanaoka*

昭和22年1月23日生まれ　奈良県出身
昭和49年3月　龍谷大学大学院文学研究科博士課程
　　東洋史学専攻単位取得により退学
現在　　奈良大学附属高等学校勤務
平成15年4月　奈良教育大学後援会会長

学長　今以上の高いレベルの教師が求められる、本当にそうなっていくと思います。そのためには大学院の充実など大学の教育研究のより一層の向上が求められます。また、外部評価というものにも取り組んでいかねばならないとも感じています。これからは内向きの大学であってはいけないと思います。

子どものターニングポイントをみきわめる教師

学長　今、求められる教師像はどのようなものだと思われますか、

花岡　いつの時代もそうですが、教師はエリート過ぎてもいけないのです。ここでのエリートは、成績だけが優秀な者の意です。成績だけが良い者は落ちこぼれるポイントがどこか（ターニングポイント）が良く理解できないことがあるのです。その意をとらえてください。教師は高いレベルの教養を持っていることが肝心です。それがまた生徒の信頼を得るのです。しかし他に何も知らず成績のことだけ出来た人はターニングポイントに気がつくのが遅くなってしまいます。子どもたちが落ちこぼれるといわれているのは、教師に落ちこぼれになるポイントがわかっていないことが原因のひとつかもしれません。

学長　そのタイミングによっては、学校や教師のひとことで、子どものその後を奪い取ってしまうこともあるということですね。

花岡　傷ついたり、落ち込んだり、人のいたみというものは、経験がないとほとんどは、わからないものです。親としては自分の子どもが、できれば傷つくような場面がなければよいと思うのが普通かもしれません。しかし幸か不幸か、なにもなくそのような状態で学や、教育学では理解できないことが多くなってくると思いますから。

学長　私たちにとっては、四年間の教員教育の中で、どこまで完成された教員を養成できるかということになると思います。数十年前に比べ、学生の能力が落ちてきたのではなく、学校教育を取り巻く環境が変わってきているというほうが正しいですね。今、不登校やそのような問題を抱えてしまった子どもたちに対応できる教員養成カリキュラムを充実していくことが必要だと思います。学内的にもさまざまな検討を始めています。これからは学生にとっても大学に入る＝勉強するだけではないということです。

花岡　はい、先ほども申しましたが、学生が自分のために、社会のために、何ができるか。夢実行に向けて何をどうするかという点でも、やはり自立の精神がポイントになります。

学長　同時に、国立大学法人化により、教育の意味を、大学の教員たちもきちんと考え直していかなければいけない岐路に立っていると思います。

後援会の働き

学長　後援会の組織についてお聞かせいただけますか。

花岡　後援会は大学での教育の振興を図るため、大学と家庭との連絡や協力により大学事業の後援並びに学生の福祉を増進させることを目的とした組織です。おもに学生の福利厚生並びに学業達成の援助に関する事業をおこなっています。

学長　平成十六年度から成績優秀者を対象に学習奨励費も実施されるということですね。

花岡　はい。学生支援事業の一環となります。

学長　他にも後援会の支援は細部にわたって行われていると聞いています。サークル活動援助金などの課外活動助成費や就職ガイダンス及び模擬面接、企業開拓や企業訪問に係わる経費などのほか、就職対策指導費、行事費などさまざまな分野での学生支援ですね。

花岡　私たちはこの大学で学んでいる自分たちの子どもが、この大学で豊かな人間性を養い、この大学を経て将来の夢を実現するにあたり、いかに、どのように支援できるかをいつも考えています。保護者としましては、自分の子どもが就職活動をする時に、今までの経験を活かして子どもとともに就職を考えるチャンスがほしいと思っています。親は安心できるものを与えがちですが、大学内で就職活動を共有し、子どもの選ぶ仕事を充分に理解できるチャンスがあればいいように思うのです。

学長　そういう学生教育、学生支援においても目的を共有して、今後も大学側と後援会のみなさんとの交流をより一層深め、接点をもつ機会を増やしていかなければいけないですね。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。本日はありがとうございました。

育ってきた人間が教師になった場合、その落ちこぼれてしまうターニングポイントがわからず、教える子どもたちと、噛みあわない教育しかできなくなってしまうかもしれないのです。

学長　最近の傾向として、与えられたことだけをする子どもたちが増えてきたようです。夢は彼方にあってやってもしかたがないというような無気力感が低年齢化していたり、応用が利かず悪循環な状態ともいわれています。それこそ教師の力で断ち切ってやらなければいけないのです。自分の力で考えて、切り開いていく力を養う手助けが必要です。

花岡　本当にそう思います。これからはカウンセリングを受けないといけなくなる小さい子どもたちも、悲しいことですが増えてくるでしょう。そのカウンセリングもできる、多くのノウハウをもった教師がほしいですね。心理

これからはたくさんのノウハウをもった教師が求められる